

# 海北友松の袋人物

## —狩野山楽・内膳との比較を中心に—

慶應義塾大学  
小松百華

海北友松（1533～1615）は、袋人物と称される草体人物画を得意とした、桃山から江戸初期にかけて活躍した画家である。ことにその最晩年にあたる慶長年間（1596～1615）には、工房を率いて、友松画の代名詞であった袋人物の表現を含む大量の押絵を制作したが、これら作品群についての詳細な検討は未着手である。本発表では、友松による袋人物画研究の一環として、同時代の画人である狩野山楽（1559～1635）及び内膳（1570～1616）の作品と比較検討を行いつつ、江戸初期における友松様式の流行について一考を提示したい。

まず、袋人物の形態についての再確認では、たとえば慶長年間前半に制作された「竹林七賢図」（建仁寺蔵）と、同後半制作の「禅宗祖師・散聖図屏風」（静岡県立美術館蔵、以下静岡県美本）との形態には大きな隔たりが認められる。発表者は、友松の袋人物が当初狩野派の人物図から出発し、慶長七年ごろから徐々に形態が変化する点に着目しつつ、静岡県美本に至るまでの変遷を検証したい。このように、狩野派に由来する袋人物であるが、のちに狩野派へと逆輸入されるという現象が起こっている。

江戸時代の初期には、絵師の流派を超えて、多種多様な主題を貼付した押絵が制作されたが、狩野派の内膳や山楽は明確に、友松の袋人物を意識した作品を遺している。内膳は二、三の友松風押絵を制作したが、特に「山水人物花鳥図屏風」（個人蔵）ではその一部の図様が、慶長年間半ばの制作と推測される友松筆「人物花鳥図屏風」（大津市歴史博物館蔵）、「雑画押絵貼屏風」（本興寺蔵）と近似しており、様式のみならず図様も友松画に依拠している。このような往時の状況は、慶長年間にはすでに友松画が広く流布していたことを暗示し、狩野派の画人でさえも流行の需めに応ぜざるを得なかったという興味深い様相を示している。

また山楽では、寛永初期頃の作と推定される「薬山射塵中塵図」をはじめとした旧押絵作品において、友松様式を取り入れつつ、独自の描法で禅宗祖師図を描いたことが知られる。ここで発表者は、本図に賛を記した単伝士印（1543～1638）ら妙心寺僧たちが、『碧巖録』に収録された、中国僧・雪竇重顕の頌古を引用している点に注目したい。友松による静岡県美本は、祖師たちを袋人物で描いた作品であるが、本屏風の賛者・鉄山宗鈍（1532～1617）は、無準師範らの頌古を引用し、賛文としている。両者は様式だけでなく賛詩の形式も本屏風と一致していることから、友松没後も引き続き袋人物の需要が高かったことを示しているといえよう。

以上、友松が他派にもたらした影響について、様式だけでなく図様・賛詩にも着目して検討を行い、江戸初期における画壇の様相を明らかにしたいと考える。